

せすには帰れない 电脑版

島村洋子



Illustration / メグ・ホソキ

双葉社

猪野賞

これが今年、私の書く最後の原稿です。

今年もいろいろお世話になりました。

年内にすることといえば、墓参りと三カ月前に死んだ犬の骨をうちのペットセメタリー（花壇だけど）に埋めることだと思う。

もし私が死んだらその灰は、リバプールのマージー河と大阪の六軒家川（安治川でも可）と東京は隅田川に撒いてくれるとありがたいと思う（余力があればロンドンのテムズにも）。

川は大海に流れ着き、上昇して雲になり、雨としてあなたに降ること



だろう。私はあなたの一部だから。逃げられませんことよ。

また生まれて来て東洋人だったら「サンヅイ」のつく名前がいいなと思う。水は私の一部だから。

というようなセンチメンタルなことはさておき、今までご説明を怠っていた「猪野賞」についての解説をしたいと思う。

ちようど去年の今頃、忘年会のようなものを西麻布の秋田料理店でしていたことである。

ある編集者が自分の上司のヤサグレ方について語ったと思ってみておくんなせい。

「すごいんですよ。会社でインシュリン注射を打って飲みに行くし」

その上司はただいま五十四歳、一度も結婚したことはなく、「女は十九に限る。二十になったらもう肌の水を弾く感じがちがう」などと言っている。

世界各地に博奕に行き、そしてボロ雑巾のように飲み続けている。

かつてはなかなか美貌だったのに、もはや落ち武者のようになってい
る。

何がすごいといったって、ルーマニアパブに通い続けたあげく、四年
も前から現地語で『恋のマイアヒ』が歌えた、というエピソードまであ
る。

私たちと飲んでいるときは翌日の中国旅行の飛行機に乗り遅れ、出社
したという人でもある（よく乗り遅れるらしい）。

その人が猪野さん（仮名）である。

一流出版社に入社するともなれば、それはもはや大エリートである。
電通いこうかな、いや日本航空かな、なんとなく出版社かな、と思う
偏差値の高い皆様だらけだろうと思う。

一流出版社に入ったからには、すてきなファッション雑誌で活躍した
いと思うのかもしれない。

そして会社員であるからして、わさわさと出世したいと思っているに

違くない。

猪野さんの考え方とそれはあさつてのほうにあるのに、同じ会社にいたりする切なさよ（お互いに）、という感じである。

「やっぱり猪野さんみたいな人は顕彰しないといけないよね」

私がなんとなくそう言ったとき、魔法のようにそこに「猪野賞」が存在したのである。

出世とは関係ないヤサグレた編集者を見つけようとしてもなかなか見つからないので、そのときとりあえず「ノ」を思いつき、第一回受賞者とすることにしたのである（欠席受賞）。

「ノ」はべつにヤサグレてはいないが、小心のあまり、なんでもない出来事を取り返しのつかないことにしてしまいがちである。

麻雀は好きだと思うが、家族サービスもしているらしく、ふだんは変な人ではないのだが、酔うと裸で飲み屋のカウンターで三点倒立したりするくらいが変であるけれど。

「ノ」は世界を信用してないらしく、一緒にいるとネガティブな世界観が移る気持ちになる。

しかし根底をなしているのが「おまぬけ」なのですべてが見事に中和されているのだ。

この「猪野賞選考会」はフリーメーソンのような秘密結社なので、ふだんは皆、しらばっくられて生きている。

しかし夏頃に、結社員が、

「Aさんはどうでしょう。見事にヤサグレています。Bさんは出世の目があると思われるのでダメかと思えます」

などとノミネートしてくるのだ。

そして暮れも押し詰まった二十七日、またその秋田料理店で「第二回猪野賞授賞式」が開かれるのだ。

「Aさんの身柄を押さえました。ばっちりで。猪野総裁の身柄も確保です。そして彼なら（ここが大切）この賞の意味を理解して、喜んでこ

の賞を受けてくれることでしよう」

と結社員からの連絡があった。

Aさんは独身のまま四十も半ばを過ぎ、もはや糖尿になってしまったと嘆いているが、気のいい男である。

彼は担当者でもなんでもないので、結社員に「年末にシマムラさんと宴会しましょう」と誘われているだけで、事情は何も知らない気の毒さである（べつに私、これ積極的にやる気ではなかったのだが、「猪野的人間」を大切にしたいという心ある編集者がいるのであることよ）。

『下山事件 最後の証言』を書いた柴田哲孝さんがそれを聞き付け、

「きりたんぼにも興味がありますが、フリーメーソンのような秘密結社に大変興味があります。何しろ私は陸軍特務機関員の孫ですから、ぜひとも見学させてください。血とか抜く儀式とかあるならお手伝いします。口もかたいです」（注・国鉄下山総裁は血を抜かれて死んでいるのであることよ）

と連絡があつた。

「では絶対に賞のことは語らないということだ」

私は授賞者にプレゼントを買い、その日を待ち続けているのである。

ということだ猪野賞は「ノ」からAさんという東大文学部卒の二連覇ということになった。

きっと彼らは郷土では勉強のできる青年だったことであろう（涙）。

郷里の母にとっては自慢の息子であることだろう。

どんなに神童でも「ハタチ過ぎればただの人」とはよくいうが、ただの人で収まっているようならまだ良いのに、と思う。

もうこれ以上お酒はありません、とお店に言われるほど日本酒を飲んで今年も終わる。

猪野賞がある限り、編集者にサムライはいると思いたい。

【著者略歴】

島村洋子（しまむら ようこ）

1964年、大阪市生まれ。帝塚山学院短期大学を卒業後、証券会社勤務などを経て、1985年にコバルト・ノベル大賞を受賞し、小説家としてデビュー。

『せすには帰れない』『家ではしたくない』『へるもんじゃなし』等のエッセイの他、『王子様、いただききっ!』『ポルノ』『てなもんやシェークスピア』『色ざんげ』など多数。

また『メロメロ』『ブスの壁』『ザ・ピルグリム』他、最新刊『恋ひらり』が絶賛発売中。